

13	国立 筑波大学附属小学校	R2～R5
----	--------------	-------

令和 5 年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

資質・能力の育成を志向するために真に必要な各教科等の本質をなす主要な概念の抽出、指導内容の構造化、およびそれらに立脚した新しいカリキュラム創出に関する研究開発。

2 研究の概要

本校では、現行学習指導要領における指導内容の過積載、いわゆるカリキュラム・オーバーロードが、次期学習指導要領に向けて今解決すべき最重要の問題と捉えた。そこで、自明視されがちな各教科等の編成原理を改めて問い直し、そこから各教科等の本質をなす主要な概念を抽出するとともに、それらを効果的に指導するのに必要十分な個別的な知識を明らかにし、各教科等、さらには教育課程全体における指導内容の構造化を図る研究を進めた。

さらに、授業時間の短縮も研究内容として位置づけ、授業の一単位時間を 40 分とし、これまで 45 分授業で指導してきた内容や育成する資質・能力の水準を維持し、これを 40 分授業において実現するための具体的な方途について検討する計画を立てた。

指導内容の構造化を新しいカリキュラムモデル創出に結びつけ、さらに授業時間の短縮を試み、その妥当性を検討し、本校としての提言を行うのが、本研究の概要である。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

上記「2 研究の概要」で述べた、本研究で取り組む主な課題は以下のように整理することができる。

- ① 各教科等の編成原理の問い直し
 - ② ①に基づく、各教科等の本質をなす主要な概念の抽出
 - ③ ①②に基づく、各教科等における個別的な知識の精選
 - ④ 指導内容の構造化（各教科等内における領域編成の見直し、指導内容の配当学年、指導順序の見直しを含む）
- ⑤ ①～④を実践するにあたり、40 分授業により、取り扱う内容、育成する資質・能力において 45 分授業と同一水準を維持するための方策の検討

※なお、上記の課題の検討作業は、③の結果に基づき②が再検討されるなど、実際には相互に行きつ戻りつしながら展開される。

上記の課題を解決するために次のような方策をとる。

指導内容のオーバーロードを解消するために、本校教員のこれまでの研究で得られた知見、また広く様々な領域の研究者の知見を基盤として、各教科等の本質をなす主要な概念を抽出するとともに、それを具現化する個別的な知識を明らかにし、指導内容の構造化を試みる。たとえば、本校の国語部では、すでに「読むこと」の領域において、その本質をなす概念として「7 系列の読む力」を想定し、それに基づいた「読みの系統指導表」（各学年で指導する「読みの技能」「読みの用語」を想定したもの）を作成して実践してきている。こうすることで、曖昧になりがちな「読むこと」の指導を精選・重点化することが可能になってきた。このことは、指導内容の構造化による効果的な指導の一つとも言える。また、学術的な議論として、たとえば各教科共通の認識諸能力を検討した西郷竹彦の「教育的認識論」の研究成果に学ぶことなども視野に入れて

いる。さらに、海外の学術的な知見、たとえばエンゲルとオチョアが提唱する、「環境」「社会制度」「文化」の3領域による社会科の内容編成などは、地理・歴史・公民という従来の枠組みとは異なるものであり、検討のたたき台として参考になるのではないかと、目下のところ考えている。これらの作業は理論研究の範疇になるものと思われる。

次いで、理論研究によってなされた指導内容の構造化に妥当性があり一般化できるものかどうかについて、実践的な研究を行う。その際、授業一単位時間を40分にして行う。40分の授業でも、設定された学習内容を網羅することができるか、一単位時間に設定された目標を達成できるか、一単位時間の内容量と年間授業時数とのバランスは取れているか、などを検証したい。実際に、本校ではいわゆる授業一単位時間における導入やまとめに費やす時間を最小限に留める取り組みをすることで、40分の授業で、十分に設定された学習内容を網羅できるという教師らの確信がある。できるだけ多くの研究授業を通して、それらの妥当性等について、具体的な児童の学びの事実在即して検討していく所存である。

本研究によって、指導内容の構造化や授業一単位時間の短縮が実現すれば、授業時数と指導内容の量的なバランスが適切な範囲に収まることにつながり、かつ学校現場の時間割にも現実的な余裕が生まれることが期待される。いわゆる深い学びの実現が、時間的に余裕をもってなされるようになることが期待される。また指導内容の構造化によって、新しいカリキュラムモデルの創出も可能になるものと考えられ、実現を試みる。

研究の成果は、本校で毎年行われる研究発表会や、各種の研究冊子の刊行などを通して全国に広く発信する所存である。

(2) 必要となる教育課程の特例

- ①各教科等の授業時数の変更（全学年）……別紙2参照
- ②授業一単位時間40分への変更

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

本校では、昭和46年度より、特別活動に教科横断的な学びを組み込むねらいで「総合活動」を設置し実験的な研究を進めてきた。平成4年度から生活科、平成12年度より総合的な学習の時間が新設されたが、それらの目標は本校の「総合活動」と合致しているという観点で、「総合活動」に一本化した教科等の編成を行っている。

各教科の各学年における指導内容、および必要指導時数についての検討を行い、教育課程表を作成し(別紙1)し、その妥当性を評価しながらカリキュラムモデルを創出した。

<教育課程の編成にかかわる事柄> 「各教科等の本質をなす主要な概念」「個別的な知識」

本校における研究開発課題は、「資質・能力の育成を志向するために真に必要な各教科等の本質をなす主要な概念の抽出、主要な概念を効果的に指導するのに必要十分な個別的な知識を明らかにすること、またこれらに立脚した各教科等における指導内容の構造化、すなわち新しいカリキュラム創出に関する研究開発」である。

カリキュラムのオーバーロードに対する問題意識が出発点となった本研究第1年次には、さらに各教科の教員がそれぞれに感じている担当教科の問題点についても以下のように洗い出して問題意識の醸成を図った。各教科等で感じていた問題点は以下の4点に集約される。

- ① 現行学習指導要領で示されている指導内容が過多、あるいは曖昧であること
(学習指導要領の問題)
- ② 学習指導要領の理解が現場教師に足りない、あるいは授業の進め方に問題がある
(現場の問題)
- ③ その教科に配当された年間指導時数が多すぎたり少なすぎたりする

④ 教科書に関する問題

これらの問題点とカリキュラム・オーバーロード問題を加味した上で、ゼロベースから新カリキュラムを立ち上げたところに、本研究の特徴がある。

研究第2年次は、指導内容の構造化を進める上で、そのもととなる「各教科等の本質をなす主要な概念」を抽出している。各教科等において、上の4つの観点に関してどのような問題があるのかを挙げ、その上で「各教科等の本質をなす主要な概念の抽出」したことは、新カリキュラム創出の礎となった。

研究第3年次は、上表にある「各教科等の本質をなす主要な概念」をもとに、指導内容の吟味、構造化に取り組んだ。小学校教育において、主要な概念を効果的に指導するのに必要十分な個別的な知識を明らかにし、それらを系統的に結びつける作業である。言わば、「点から線へ」指導内容をつなげたのが第3年次の研究と言える。

研究第4年次は、これまでの研究をもとに、各教科等において新しいカリキュラムを創出していった。これは「線から面へ」というイメージで、各教科等におけるカリキュラムの全体を見通しての作業となった。

ところで、「カリキュラム」という言葉は、いろいろな位相をもっている。

◆カリキュラム(以下:C)の概念と位相

①制度化されているC 学習指導要領

②計画されているC 各学校の年間指導計画
「意図されているC」

③教えられているC 各教員の学習指導計画
「実施されているC」

④経験されているC 学習者の経験内容
「達成されているC」

一般的にカリキュラムというと、まず制度としての学習指導要領があり、そこから上位下達のように各学校、各教員へと、その意図や学習内容が下りていくというものを想起する。これは、左図の①から④、つまり上から下へと降りてくるイメージと重なる。

本研究は、図中の③と④の往還によってなされる授業改善を通して、それを基にして本校各教科等の指導計画を立ち上げることに特徴があると考えられる。すなわち、図のイメージを下から上へ逆向きに捉えてカリキュラムを創出するという方策を採ったのである。

【図】 田中(2001)によるカリキュラムの分類

「筑波大学附属小学校版新カリキュラム」の創出とは、③と④を往還、授業改善を繰り返し、各教員の指導計画を各教科の研究部で集積、吟味して作成したもの(つまり②)の「各学校の年間指導計画」を創出することに相当する。

結果的には、新カリキュラムは、各教科等において全学年、全分野に及ぶ完成したものにはなっていないが、各教科等の本質をなす主要な概念に基づいた指導内容を構造化する方法を明らかにできたことで、新カリキュラムの残された部分の作成に見通しが立てられたことは成果であった。

できあがっている新カリキュラムは、各教科間で違いがある。ある教科は複数分野があるうちの一部分のカリキュラムを作成し、ある教科ではほぼ全体像が明らかになっている。またカリキュラムの表現方法にも各教科等で違いがあることも申し添えておく。そもそも、各教科等がもつ問題意識の所在に違いがあるので当然の所産とも言える。

いくつかの特徴的なカリキュラムづくりを行なった教科に関する例を挙げる。

例えば、国語科は、学習指導要領ベースでは明確にされていない「読むこと」の指導事項を、「思考力、判断力、表現力等」「知識、技能」に分けて整理した。

また、算数は、図形分野に特化したカリキュラムを、全学年を通して作成した。「平行」「直角・垂直」「合同」「対称」「円」という5つの軸で図形カリキュラムを編んだのである。これによって、子どもにとって単元間の関連性の意味を理解しやすいカリキュラム構造となった。

理科は、これまでの分野による単元のグルーピングではなく、子どもの思考の流れ、傾向による「学びの系統」を組織し直した。結果6つの系統「くらべ、そろえ、ハッキリさせる系統」「見えないものを見えるようにする系統」「時間をかけて変化をとらえる系統」「なかま分け、類別する系統」「つくりと仕組みを結びつける系統」「大きな枠組みで考える系統」が生まれた。これによって、単元を扱う際、軽重をつけて時間配分することが可能になり、結果的に時数の削減、あるいは深い学びの実現が可能になると見込まれる。

音楽科は、標準指導時数に対する教科書で扱う教材数の多さに鑑み、個別的な知識の洗い出し、知識ベースで系統を組み直した結果、教材数の削減を提案するに至った。結果、一つの教材、題材にしっかり時間をかけて指導することに成功し、深い学びの実現が見込まれるとした。

これらのように、指導内容の見直しは、今次の学習指導要領で謳っている「3つの資質・能力の育成」、「深い学び」の実現のためにも寄与するだろう。

本研究に取り組むきっかけとなったのが、我が国のカリキュラム・オーバーロードに対する問題意識であったことに鑑みれば、本研究で創出する教育課程は、現在のそれよりも「指導内容のスリム化」が実現されていなければならない。しかし、結果的には、指導内容がスリム化された教科もあれば、スリム化というよりは学ぶ順序や系統が整理されて、より子どもが系統性を実感しながら学べるような指導内容への改善がみられた教科もあった。

数字で示すことができるスリム化の成果もある。

＜教育課程の特例にかかわる事柄＞ 「40分授業」

また本研究では「40分授業の試行」も行っている。これについては、昨年度までもその成果について報告している。「不要な（あるいは省略できる）前時想起の時間や、本時振り返りの時間を省くことで、40分授業での学習内容定着は可能である」ということ、また授業と授業の間を10分の休憩としている点について、本時に行った学習を児童個々が咀嚼する時間に当てたり、教師に対する質問をする時間に当てたり、あるいは次の授業の準備に当てたりと、充実した10分を児童それぞれが過ごしていることを確認した。このことも「深い学び」の実現に寄与すると考えられる。

＜本校学校研究との関連＞ 「研究テーマ：『美意識』を育てる」

本研究は、本校学校研究（テーマ「『美意識』を育てる」）と並行して進行してきた。各教科等の本質をなす主要な概念の抽出、あるいはそのもとにある編成原理、また具体的に目指す子ども像については、学校研究でいうところの「美意識」を常に意識したものとなる。学校研究の内容である「『美意識』研究に根差したカリキュラム」、これが本校の目指したカリキュラムのもう一つの特徴ということになる。

学校研究で定義している「美意識」とは、「その子の『みえ方』や『こだわり』をもとに、本質を捉え深めようとする心の働きである。それは『共に幸せに生きるために発揮される資質・能力』の源である」と定義している。

今次学習指導要領では、3つの資質・能力育成の重要性を説いている。本校としてもその重要性を共有している。しかし、例えば、単に多くの知識や技能を蓄積すればよいというものではない。間違った方向に知識や思考力を働かせてはいけない。本校では、資質・能力を本質的な方向に働かせようとする「何か」があり、そこに働きかけるような教育活動を行おうとする立場に立っている。つまり育成すべき資質・能力、その深層、あるいは下層の部分に育てるべきものと仮定し、それを「美意識」と名付けることとしたのである。すなわち、子どもに「美意識」を育てることを一義にすること、これを本研究で構築するカリキュラムの編成原理としながら、各教科等の本質をなす主要な概念の抽出、さらには各教科等の個別的な知識の精選を行い、カリキュラム創出に漕ぎつけるという道筋を想定したのである。

大きな成果は、子どもの教材に対する「みえ方」を重視して学びの系統を整理したことであ

る。学習指導要領は、各教科等の親学問に鑑み、それを小学校教育の段階でどの程度どのように学ばせるかという視点で学びの系統が整理されている。しかし、本校の「美意識」研究では、子どもからどのようにその教材が「みえているのか」という、子どもの素朴な見方や考え方を出発点にして授業構成を試みている。その素朴な見方や考え方が、授業を通して一般的なその教科特有の見方・考え方へと昇華していく過程を大切にしているのだ。

今般の研究開発においても、この考え方（子どもの「みえ方」から出発して学習内容の構造化を行う）を大切にしている。これが本研究の大きな特徴ともいえる。

このように、本校の学校研究では、子どもの「美意識」を育てるための授業づくりを行ってきた。研究第1年次（令和2年度）は、つくる授業一つ一つが、「美意識」を育てる授業であったが、それらは一つ一つの点として点在したと言える。しかし、2年次（令和3年度）、3年次（令和4年度）と研究が進む中で、一つ一つの点がつながりをもった「線」としての系統が見えてきて、4年次（令和5年度）は、さらに「面」としてのカリキュラムが出現するに至ったのである。

研究開発の研究は、学校研究の成果と軌を一にしてきたことを申し添える。

（2）研究の経過

（＊年次ごとの重点には、下線を引いている）

第1年次	<p>(1) <u>【各教科等の編成原理の問い直し、各教科等の本質をなす主要な概念の抽出】</u></p> <p>(2) <u>【各教科等における個別的な知識の精選】</u></p> <p>(3) <u>【教育課程全体における指導内容の構造化】</u></p> <p>① 校内研究会を開催して検討を行うとともに、運営指導委員会を開催して専門的見地からの検討を加える。</p> <p>② 運営指導委員会外の研究者等、本研究に関係する専門家に対するインタビューや、専門家を招いた講演会を行い、さらなる専門的知見を得る。</p> <p>③ 諸外国の教育課程についての情報を収集し、分析に当たる。</p> <p>④ 本研究に関係する先進的な取り組みを実施している学校の視察を行い知見を得る。</p>
第2年次	<p>(1) <u>【各教科等の本質をなす主要な概念の抽出、指導内容の構造化、および授業一単位時間短縮に基づく実践的研究および理論の修正】</u></p> <p>① 第1年次研究で整理できなかった「各教科の本質をなす主要な概念の抽出」「各教科等における個別的な知識の精選」「教育課程全体における指導内容の構造化」の理論を、実践的研究で得られた知見をもとに構築する。（運営指導委員会および校内研究会）</p> <p>② 各教科等の指導内容の構造化を行い、現行学習指導要領（平成29年告示）とは異なる指導事項等について、また授業一単位時間短縮について、授業実践（実践的研究）を通してその妥当性を検討する。</p> <p>③ 本研究に資する国内外の研究情報の収集および視察をする。</p> <p>④ 現行学習指導要領（平成29年告示）とは異なる指導事項等について、児童に育成すべき資質・能力がついたか否かを検討するための検査の内容を検討し、実施する。</p> <p>(2) <u>【指導内容の構造化に基づく新しいカリキュラムモデル作成】</u></p> <p>① 教育課程全体における指導内容の構造化をもとに、カリキュラムモデルを作成に取り組み始める。</p>
第3年次	<p>(1) <u>【指導内容の構造化、および授業一単位時間短縮に基づく実践的研究および理論の修正】</u></p> <p>① 第2年次に引き続き、現行学習指導要領（平成29年告示）とは異なる指導事項等に</p>

	<p>ついて、また授業一単位時間短縮について、授業実践（実践的研究）を通してその妥当性を検討する。</p> <p>② 実践的研究で得られた知見をもとに、第2年次研究で整理しつつある「各教科の本質をなす主要な概念の抽出」「各教科等における個別的な知識の精選」「教育課程全体における指導内容の構造化」の理論に修正を加える。（運営指導委員会および校内研究会）</p> <p>③ 本研究に資する国内外の研究情報の収集および視察をする。</p> <p>(2) 【指導内容の構造化に基づく新しいカリキュラムモデル作成】</p> <p>① 第2年次に引き続き、教育課程全体における指導内容の構造化をもとにした、カリキュラムモデル作成を継続し、完成を目指す。</p>
第4年次	<p>(1) 【筑波大学附属小学校版 新カリキュラムモデルの作成および発表】</p> <p>① 3年間にわたる理論的・実践的研究の成果をまとめるために「筑波大学附属小学校版 新カリキュラムモデル」を作成する。</p> <p>② 本研究の成果を6月に開催される本校研究発表会等で広く内外に発信するとともに、各種の研究冊子などを通して広く発信する。</p> <p>③ 継続して、第1年次研究によって整理された現行学習指導要領（平成29年告示）とは異なる指導事項等について、また授業一単位時間短縮について、授業実践（実践的研究）を通してその妥当性を検討し、常に研究の成果について更新を試みる。</p>

(3) 評価に関する取組

第1年次	<p>(1) 【各教科等の編成原理の問い直し、各教科等の本質をなす主要な概念の抽出】</p> <p>(2) 【各教科等における個別的な知識の精選】</p> <p>(3) 【教育課程全体における指導内容の構造化】</p> <p>*上記の研究内容に対する評価</p> <p>主に運営指導委員会にその妥当性についての検討を依頼する。また本研究内容に造詣が深い研究者および関係機関に聞き取り調査等を行い、評価を得る。</p>
第2年次	<p>(1) 【各教科等の本質をなす主要な概念の抽出、指導内容の構造化、および授業一単位時間短縮に基づく実践的研究および理論の修正】</p> <p>*上記の研究内容に対する評価</p> <p>① 研究授業ならびに日常の授業実践から得られる児童の表現物、アンケートおよび児童の観察から得られる資料をもとに、その妥当性を検討し、第1年次研究の整理に、修正を加える。</p> <p>② 研究授業を積極的に行い、その協議を通して理論の妥当性を検討する。その際、運営指導委員会を併催し指導ならびに助言を仰ぐ。</p> <p>③ 各種の学力検査（対象学年3年、5年、6年、実施時期は、6年は4月、3年と5年は2月）や、本校が独自に作成する検査を行い、量的なエビデンスを得る。</p> <p>④ 本校が独自に作成した検査に関して、その信頼性・妥当性を検討する。検討については、心理学等の研究者など専門家の指導ならびに助言を仰ぐ。</p> <p>(2) 【指導内容の構造化に基づく新しいカリキュラムモデル作成】</p> <p>*上記の研究内容に対する評価</p> <p>主に運営指導委員会にその妥当性についての検討を依頼する。また本研究内容に造詣が深い研究者および関係機関に聞き取り調査等を行い評価を得る。</p> <p>●「主要な概念」および「指導内容の構造化」の表現方法については、単なる題材名、単元名の表への落とし込みではなく、編成原理に基づいた独創性のあるものを目指す。</p>

<p>第3年次</p>	<p>(1) 【指導内容の構造化、および授業一単位時間短縮に基づく実践的研究および理論の修正】</p> <p>*上記の研究内容に対する評価</p> <p>① 第2年次に行うことができなかった教科等について、研究授業ならびに日常の授業実践から得られる児童の表現物、アンケートおよび児童の観察から得られる資料をもとに、その妥当性を検討し、第1年次および第2年次研究の整理に、修正を加える。</p> <p>② 第2年次に行うことができなかった教科等について、研究授業を積極的に行い、その協議を通して理論の妥当性を検討する。その際、運営指導委員会を併催し指導ならびに助言を仰ぐ。</p> <p>③ 第2年次の実績、反省に基づき、各種の学力検査（対象学年3年、5年、6年、実施時期は6年は4月、3年と5年は2月）や、質的なエビデンスを得られるよう努める。</p> <p>(2) 【指導内容の構造化に基づく新しいカリキュラムモデル作成】</p> <p>*上記の研究内容に対する評価</p> <p>第3年次には、新しいカリキュラムモデルを完成させる。主に運営指導委員会にその妥当性についての検討を依頼する。また本研究内容に造詣が深い研究者および関係機関に聞き取り調査等を行い、評価を得る。</p>
<p>第4年次</p>	<p>(1) 【筑波大学附属小学校版 新カリキュラムモデルの作成および発表】</p> <p>*上記の研究内容に対する評価</p> <p>① 新カリキュラムモデルを6月に開催される本校研究発表会等で発信する。その際、協議会で参会者の意見などを集積するとともに、アンケート調査を行い、その妥当性について検討する。</p> <p>② 新カリキュラムモデルを各種の研究冊子に掲載するなどして広く発信し、アンケート調査等を行うなどして、その妥当性について検討する。</p> <p>③ 新カリキュラムモデルを関係機関や本研究内容に造詣の深い研究者に示し、聞き取り調査などを通して評価を得る。</p> <p>④ 運営指導委員会を開催し、上記の①～③の集積、分析を行い、本研究全体の質的な評価を行う。</p>

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

<児童への効果>

音楽科の例を挙げる。一つの教材、あるいは題材、単元の学習が、点ではなく、線や面で結ばれるようになったことが、子どものノートや発言などから見取ることができるようになってきている。つまり児童への効果が可視化できるようになってきたと考えている。

6学年の例である。鑑賞で「春の海」（宮城道雄作曲）を聴いた際、「『剣の舞』に似ているなあと考えた。最初と最後と真ん中に合いの手があった」とノートに記述しているのが見て取れた。これは、「合いの手」という学びの系統で、5学年で学んだ「剣の舞」と6学年で学ぶ「春の海」が、この児童の中でつながった証拠である。一聴してこの気づきが生まれていることが、本研究の取り組みの効果の例とみることができる。

同様の表れは、どの教科等の学習でも確認することができた。

キーワードは、「学びの系統」である。児童がそのとき学習している内容を既習の学習とつなげて捉えることができていることを、教師たちが実感できるようになっている。これは、大きな効果と言ってよいと思われる。

<教師への効果>

4年間の本研究を振り返って、研究推進を中心に進めた教員チーム9名にアンケートをとった。そのうちのいくつかの設問について、以下に紹介する。

〇〇科で創出したカリキュラムの内容は、どの程度適切であったと思われますか？



上記の設問「〇〇科で創出したカリキュラムの内容は、どの程度適切であったと思われますか？」に対しては、「まあまあ適切であった」の66.7%が「適切であった」の33.3%を大きく上回った。このことについて、以下のようなコメントがあった。

図工科では、限られた時数の中で、「もの」「こと」「ひと」という3つ領域を子どもたちが自ら横断していく姿がみられた。コロナ禍の中でのオンライン環境も一つの学びの場となり、図工室と家庭での学びがつながり、「もの」「こと」「ひと」を対象につくることが、とても自然に一体化できていた。「まあまあ」という表現になったのは、まだ「もの」「こと」「ひと」ユニットを可能にする題材や活動の事例が少ないためである。

実施した指導方法等は、
どの程度適切であったと思われますか？



逆に、上記の設問「実施した指導方法等は、どの程度適切であったと思われますか？」に対しては、3分の2の教師が、「適切であった」と回答した。

外国語科では、英語によるやり取りにおいて、聞くことから段階的にはじめ、個別の知識を
使えるようにする実践を重ねた結果、子ども同士のやり取りにおいても、1分間のチャットや
交流会などにおいて、コミュニケーションの継続を図ろうとする姿勢が見られた。それは、系
統だてた知識を知っているだけに留まらず、それをいかに使ってコミュニケーションを図るか
といった視点でとらえられた結果だと思われる。

この4年間の研究開発の研究は、先生ご自身にとって
どの程度有益であったと思われますか？



アンケート最後の設問「この4年間の研究開発の研究は、先生ご自身にとってどの程度有益であったと思われますか？」に関しては、すべての教師が最高位である「有益だった」と回答している。

カリキュラムを編み直すということは、教師が「教えたい」と願う「教科の本質」と子どもが「学びたい」と願う「みえ方」や「こだわり」との「せめぎ合い」を通して「授業改善」をし続けていくという不断の「営み」が必要不可欠である。それは、「教科の本質」とそれに迫るための「内容の美」や「方法の美」を明らかにし、子どもの「みえ方」や「こだわり」との結節点としての「子どもの問い」を成立させ、その問いの追究を通して子どもたちの中に育まれた「美意識」を見取り、「授業改善」をしていく…、実は、教師として欠かすことのできない大切な「営み」だったと今になって実感している。

本研究は、「筑波大学附属小学校版の学習指導要領をゼロベースで作成する」という意気込みをもって全職員で当たってきた。本校では3～4年間に一度のペースで、その時代にマッチしたテーマを掲げており、常に新鮮さをもって研究に当たることができている。本研究開発は「『美意識』を育てる」をテーマにした学校研究とタイアップして行ってきた。「美意識」研究をベースにカリキュラム作成に取り組むという難しさを感じつつも、精力的に研究を推進することができたこと、その達成感を上のアンケートから十分に読み取ることができた。

もちろん、すべてのカリキュラムを編めたわけではないし、改善点があることもあるが、本研究に取り組んだことで、さらなる授業改善、カリキュラム創出の意義について考える機会となったことは、全職員の共通の果実となった。

<保護者等への効果>

本校の使命として、常に将来の初等教育の在り方を実験的に探ることを掲げ、そのことを承知したうえで入学していただいている状況にある。したがって、研究内容に関する周知はもちろん、研究に対する理解をいただいているところである。

本研究に関しても、批判的な意見は聞かれない。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

研究開発学校の指定を受け、4年間の研究に取り組んだ。元来、本校は各教科等の指導法などに関する理論的・実践的研究を進めてきている土壌もあり、全職員のマインドを揃えることに苦労はなかった。今回特別だったのは、ゼロベースで、筑波大学附属小学校版新カリキュラムの創出という課題があったことだ。ゼロからカリキュラムを立ち上げることは並大抵のことではなかったが、それだけにやりがいのある取り組みとなった。そのことは、職員へのアンケートからも十分に読み取ることができる。

今般の研究が全職員にとって有益だったことの要因は、「研究における自由度」と考えられる。特例をいただいて、40分授業の実施、時間割の自由な編成が可能になったことで、思い切った研究ができたことが、職員の満足度を高めることにつながったと思われる。

研究実施上の問題点と今後の課題については、2つある。ひとつは、新カリキュラム創出にあたり、全ての教科等で、十全な指導計画が完成に至っていないことである。これは、問題点であり今後の課題である。令和5年度3月までは、研究を進め、その成果を学校ホームページ上で公開したいと考えている。

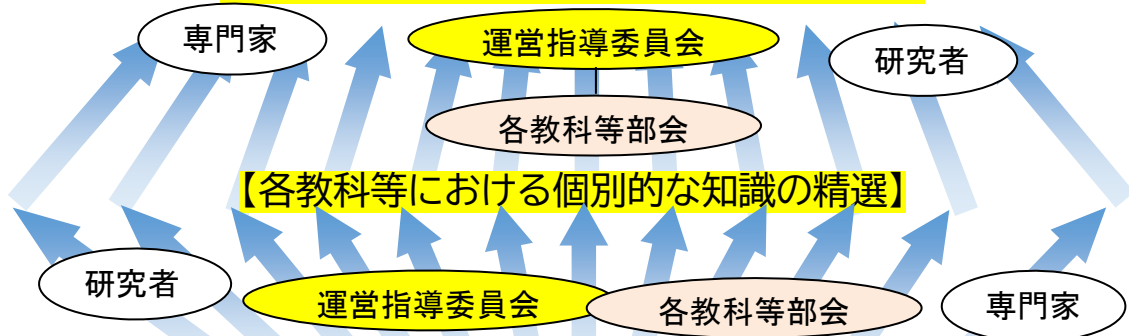
もうひとつは、研究で得られた成果を今後の学校運営に生かすべく、柔軟な対応が望まれることである。40分授業や柔軟な指導時数の運用は、かなり有効であることが感じられた。これをすべて標準のシステムに戻すことは、今後の学校運営には有益ではないように思われる。制度の整備において、柔軟な対応を願うところである。

教育課程の内容、研究内容

【筑波大学附属小学校版新カリキュラム】

国語科	社会科	算数科	理科	音楽科	図工科	家庭科	体育科	外国語科	道徳科	総合活動
「思考力・判断力・表現力等」の「読むこと」において、読みの「知識及び技能」を位置づけたカリキュラム	子どもの「みえ方」や「こだわり」と「教科の本質」との結節点である「子どもの問い」を軸に据えたカリキュラム	課題設定や問題解決を進めるための数学的な見方・考え方を効率よく働かせる「5つの心の働(軸)」で構成したカリキュラム	自然事象にどのように迫っていくのかで6つの種類に分類整理したカリキュラム	音楽科の個別的な知識を分類整理し、それをもとに学びの系統を立てた。教材数の精選、深い学びの実現を目指したカリキュラム	表現と鑑賞という領域を解体し「もの」「こと」「ひと」という3つ領域から構成したカリキュラム	子どもたちに自分の成長を実感させ、それを試す機会を設定することで、時代や文化を超えて生きる力を身に着けるためのカリキュラム	子どもたちがみにつける感覚・技能9つの柱に分類整理。時数削減も視野に入れたカリキュラム	言語材料の精選、場に応じた表現の習得、それを活用するための知識を身に付け、文構造を理解しながら自己表現につなげるカリキュラム	「よりよく生きる」「人間のよき心」をベースに、各内容項目のつながりを見直したカリキュラム	子どもが課題設定をする際の4つの観点を軸に編成したカリキュラム。それは、「美意識」の変容を捉える観点でもある。

【教育課程全体における指導内容の構造化】



【各教科等における個別的な知識の精選】

【各教科等の編成原理の問い直し、各教科等の本質をなす主要な概念の抽出】

国語科	社会科	算数科	理科	音楽科	図工科	家庭科	体育科	外国語科	道徳科	総合活動
感覚と論理が往還する互恵的な言語活動を通して、子ども自らが言語生活を切り拓く力を育てること。	「民主主義の担い手」として「よりよい社会」とは「どうあるべきなのか」、「自他の人格を尊重」し、「多角的な思考や理解」を通して、その実現のために「どうすればよいのか」、「公正な判断」をもとにねばり強く問い続けていくこととする心の働きを育むこと。	数量や図形についての概念理解や問題解決するための課題を、仲間と共に見出し、その課題を解決するために、既習や経験との関連を見つけた、仲間の見出した方法や考え方に心動かされたりしながら、自らの数量や図形に「みえ方」を豊かにし、自覚的に働かせることができる「見方」へと成長させ、自ら算数の世界を拡げていく力を養うこと。	観察や実験を通して自然の事象に迫り、問題解決の過程を通して自然事象に対する意味理解と原因と結果を結び付け論理的に考えることの良さを感得できるようにし、またこれらの営みを協働で繰り返し行うことを通して、子どもたちに美意識を育むこと。	音楽活動の楽しさを体験することを前提として、子どもの「みえ」を起点に音楽の「美」(内容の美)に気づき、それらを感覚的・論理的に一体として捉える過程で、双方向だからこそ実現する表現力や鑑賞力を高め、子ども自らがこだわりをもって音楽の世界を広げられるような力を養うこと。	対象や事象の形や色、手触りや質感、動きやイメージなどに対する「その子の感じ方やみえ方～感受」を出発点とした造形的な活動を通して、造形要素を基に感覚的思考、論理的思考を行き来働かせながら「今の私」の見え方や感じ方を大切に、造形的に表現することで、仲間と共に「その先にあるかもしれない『美』」に意識を向けようとする」心を育み、答えのない未来を創造していく育てること。	人がよりよい家庭や社会(Well-being)を希求することを前提とし、誰もが直面する生活の問題を統一的な実践課題として捉え、その解決過程を探究する方法を学習することを通して、実際の生活における課題と主体的に向き合う力を育むこと。また、自分自身の働きかけによって未来を創造することができるという前向きな思いを、各学習活動において育み高めること。	運動学習を通して、基礎運動感覚・運動技能、運動技能を獲得するための知識、できるまで(問題解決)の過程、運動とのかかわり方、仲間との関わり方・仲間と協力する意味等を学習すること。	言語を学ぶ意義や楽しさを体験しながら、4技能の言語活動を通して、コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて自分の考えや気持ちや基礎的な力を養い、他者とのよりよい関係を築くために(共に幸せに生きるため)、自分なりに考えコミュニケーションを図ろうとする心や態度(マインド)を育てること。	行動の善し悪しではなく、その行為行動を起こすに至った「大本(おおもと)」の心に焦点を当て、意味づけし、価値観を構築すること。	イノベーションを創り出す力を育てるために、美意識に基づいた子どもの問いや思いによって決めた課題を、「STEM的見方・考え方を働かせたり、試行錯誤や友だちと協働したりすることを通して追究すること。

【学校研究:『美意識』を育てる」を各教科等の編成原理に】



国語 社会 算数 理科 生活 音楽 図工 家庭 体育 外国語 道徳 総合活動

3～4年目

1～2年目

筑波大学附属小学校 教育課程表（令和5年度）

	各教科の授業時数										特別の教科道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	総授業時数	
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語						
第1学年	要領	306		136		102	68	68		102		34		0	34	850
	本校	238		136		0	68	68		102		34		102	0	748
	差	-68		0		-102	0	0		0		0		102	-34	-102
第2学年	要領	315		175		105	70	70		105		35		0	35	910
	本校	245		175		0	70	70		105		35		105	0	805
	差	-70		0		-105	0	0		0		0		105	-35	-105
第3学年	要領	245	70	175	90		60	60		105		35	35	70	35	980
	本校	245	70	175	105		70	70		105		35	35	105	0	1015
	差	0	0	0	15		10	10		0		0	0	35	-35	35
第4学年	要領	245	90	175	105		60	60		105		35	35	70	35	1015
	本校	245	105	175	105		70	70		105		35	35	105	0	1050
	差	0	15	0	0		10	10		0		0	0	35	-35	35
第5学年	要領	175	100	175	105		50	50	60	90	70	35		70	35	1015
	本校	210	105	175	105		70	70	70	105	70	35		105	0	1120
	差	35	5	0	0		20	20	10	15	0	0		35	-35	105
第6学年	要領	175	105	175	105		50	50	55	90	70	35		70	35	1015
	本校	210	105	175	105		70	70	70	105	70	35		105	0	1120
	差	35	0	0	0		20	20	15	15	0	0		35	-35	105
計	要領	1461	365	1011	405	207	358	358	115	597	140	209	70	280	209	5785
	本校	1393	385	1011	420	0	418	418	140	627	140	209	70	627	0	5858 (5207)
	差	-68	20	0	15	-207	60	60	35	30	0	0	0	347	-209	73 (-578)

* コマ数だけでみると、73時間のオーバーになるが、（ ）内にあるように、45分で換算するとコマ数は578時間のマイナスになる。

学校等の概要

1 学校名、校長名

ソクバダイガクフソクショウガッコウ ササキアキヒロ
筑波大学附属小学校 佐々木 昭弘

2 所在地、電話番号、FAX番号

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1
03-3946-1392 03-3946-5746

3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

(小学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
127	4	122	4	123	4	125	4	126	4	126	4	749	24

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	教務補佐員	栄養教諭	講師
1	1		4		29		1	2	1	5
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
1	1	2	1	49						

5 研究歴

研究開発課題 「自分づくりを支える教育課程」
指定期間 平成9年度より平成11年度まで（3年間）